

あの夜、雨は止まらなかった。屋根や窓をたたく音が何日も続き、スマホの警報は何度も鳴り響いた。濁った川は堤防ぎりぎりまで迫り、家の中にいても胸の奥がざわざわして眠れない。テレビには「避難指示」の赤い文字。普段は静かな町が、見えない巨大な水の力に追い詰められていた。

二〇一八年、西日本豪雨。降り続いた雨が弱まって外に出ると、道路は所々で冠水し、側溝から泥水があふれていた。ニュースには泥に埋まった家、流された車、懸命に片づけをする人たち。あの映像は今も頭から離れない。「もし水があと少し高かったら…」そう思うと背筋が冷えた。

あれから数年、町は変わった。川幅は広げられ、堤防は高く厚くなり、道路も整備された。重機の音、工事車両、積み上がるコンクリート。あのとき不安に震えた町に「備える力」が形になって立ち上がっていくのを見ていた。そこに流れ込んでいたのは、水ではなく日本中から集まったたくさんの支援と、税金という希望の光だったのだ。

大規模な河川改修は個人や一つの町だけでは到底できない。材料費、設計、工事、復旧と改良にかかる長い時間。誰か一人では支えられない重さを、全国のみんなが少しずつ分け合って背負う仕組み、それが税金なのだと実感した。そして気づく。税金が守っているのは洪水対策だけじゃない。教科書、壊れた机を直す費用、通学路の街灯、災害時の非常食や避難所の毛布。こうした、あたりまえの多くに税金が使われている。給食のトレイを受け取る手を見ながら「これも支え合いの一部なんだ」と思うようになった。

もし税金がなかったら？堤防は作れず、壊れた道路もそのまま、避難所に備蓄もなく、次の大雨で同じ悲しみが繰り返されるかもしれない。税金は「災害が起きてから助ける」だけでなく「前もって備えて被害を小さくする」お金でもある。命の余白、安全の予備力。それが税金の正体だ。

では、僕たち中学生に今できることはあるだろうか。まず、知ること。何に使われ誰を支え、どんな未来につながるのか学ぶこと。次に、守ること。公共のものを大事に扱う、教科書を汚さない。水道を出しっぱなしにしない。無駄を減らすことも、立派な税金の活かし方だ。そして、備えること。避難訓練を本気でやる。家族と集合場所を決める。非常袋を点検する。命を守る準備は、税金で作られた仕組みと、僕たちの行動が重なってこそ力になるのだ。

税金は「僕たち全員の力」を集めて形にした共同の約束だ。今は守られる側にいる僕たちもやがて働き納税し、次の世代を守る側になる。そのとき「ありがとう」で終わらず、「今度は任せて」と言える大人になりたい。

だから伝えたい。税金、それは『未来を守る約束』なのだと。